

の二年の入門者0人は理解に苦しむ。

演者は何故文化二年の入門者が0人であったかという謎について一つの結論を得たので発表したい。

(弘前大学医学部麻酔科)

18 河口良庵著『寛文十庚戌歲)阿蘭陀語』

本に就いて

川 島 恂 二

本書は最近入手したが、京都から出た本の由である。題名「阿蘭陀語」と書いてあるが、文学書的部分は帖末に数頁あるのみで、実は阿蘭陀薬物名を片仮名で書き、その片仮名書き単語の下欄に邦語訳名が書いてある形式の単語集という訳である。イロハ順分類。

本の形態は紺色の横版綴じ本で、和紙三四頁中の二四頁が薬物単語篇、七頁が日常日本語のオランダ語の和訳単語集である。この単語部は単語篇、動詞篇、助動詞篇などから成り、極く初期の和蘭語記憶帖であって辞書の極めて前段階の日常便利帖に過ぎない。最後の四頁に、河口良庵・春益師が一番弟子の川口良閑(古河の河口家祖)にこの帖と、秘伝和蘭陀外科要訣全書を与えた理由が記

してある。

本の大きさは縦13.2 cm、横20.5 cmの小型帖である。

本木良意、前野良沢、吉雄耕牛、その他多数の無名通詞の人々の努力の積上げで、遂に杉田玄白を代表とする『解体新書』の翻訳の大事業が実現されたが、寛文十年

(一六七〇)に河口良庵が記いたこのメモ帖も、極めて広義に見る限り、一つの翻訳を記録した日蘭語記憶帳(辞書の前段階)であったと思う。

記載例

- 一 ホック 書物
- 一 ホルガス 散ス
- 一 ホロット 腐リ
- 一 ホロウ 止ル
- 一 デレツキ 吸
- 一 ケネエス 愈ス
- 一 ラン。トイブ 浅イ
- 一 トイブ 深イ
- 一 レキト 軽イ
- 一 ズワアル 重イ

一 スタルコル 辛イ

の様な具合で、大中小、大豆、小豆、小麦、釜、鍋、夜、昼……盃サソウ(酒を注ぐ)、ココニ来ヨ、アリク(歩く)、戻ルコト、伴行スルコト、何ヲ云フ、何トスルカ……の単語、動詞、助動詞などが適当に書き並べてある。

末尾の文(要約。漢文を白文で書いてある)

阿蘭陀外科書は世に頗る多いが邪を好み正を憚かつて奥儀を辛千苦万の経験を経て書いている本は實際のところ見当らない。私は異人の言を断つて、真に自己の信ずる膏薬使用の奥儀を、他書を引用せずに、自分のものにした奥儀を八巻と一巻の注釈本を書き上げた。阿蘭陀流は外科であつても内科も兼ねている。この経験記本は唯だ一子に授ける。

寛文拾庚戌歳上陽日に肥之前国長崎之住人川口良医(良閑のこと)は我が庵に遊び入道を夢みてよく勉学するから春益子(良庵のこと)は謹んで之を許す(私の著述書八巻と註一卷をお前に与ふるぞ)。(以上の要旨である)

即ち河口良庵はかくて現古河の河口家蔵する『外科要訣全書』五巻の自筆清書本を河口良閑に与えて、自らは

長女才蝶が嫁している大洲城に寛文十年後半赴いて医官となつたと考える。大洲には川口良閑の弟門人の鎌田良球（子孫はずっと医を継ぎ、今、産婦人科医）がいて、師良庵と才蝶さん（同じく大洲の徳正寺に嫁した）の面倒を見て呉れたのであらう。

茲に良庵は八巻と別の註記一卷と書いてゐるのに、五巻迄きり存在しない理由であるが、恐らく良庵の先妻の長男宮崎元仲か、又は後妻の長子河口温良庵の何れかが京都で次々と借り受けて写本中に、河口良閑は志州鳥羽城主土井利益（としま）に元和元年（一六八一）に召され更に唐津移封に随行したので、六・七・八巻と別巻一冊は誰かのところに残つてしまい、今日欠本となつてしまつたと考へる。因に元仲は京より伊豆韮山に移り、温良庵か子孫は林雲端となつて、京より越前大野に移つた想われる。

小冊子ながら、内容は色々に豊富である。
（宮城県古河市）

19 『蘭学事始』と『蘭東事始』

片桐 一 男

杉田玄白が執筆して大槻玄沢に託した草稿本の伝存は未詳である。

富山高岡市の長崎家に伝わる古写本『蘭東事始』は、大槻玄沢が師杉田玄白から草稿を託され、手を加えて、『事始』を成稿したとみなされている文化十二年（二八一五）から、わずか五年後の文政三年（一八二〇）九月の筆写本で現存最古の一本である。

浩齋の問い合せに回答した玄沢の書翰や、関係長崎家資料にみられる『蘭学事始』『蘭東事始』関係記事を整理して、現在における書名をめぐる判明点を報告しておきたい。

①文化十四年（一八一七）手録『東遊襍録』の「東都雑事